

# 完 了 報 告 書

【研究テーマ】

「終末期在宅医療の効果的広報の試み  
—在宅看取り遺族による手記文集を用いた広報活動—」

(申請者名) 長尾和宏  
(所属機関) 医療法人社団 裕和会 長尾クリニック  
(職 名) 院長  
(所在地) 〒660-0881 兵庫県尼崎市昭和通7丁目242番地  
(提出年月日) 平成19年6月26日

## 【事業報告】

### 1 広報小冊子「はじめての在宅医療—10の素朴な疑問にお答えします—」 の刊行報告。

#### 1) 作成の趣旨

既に、桜井隆氏らにより作成された素晴らしい広報冊子「お帰りなさいプロジェクト—あなたの家に帰ろう—」が存在するのを知り、本冊子では、「看取りの実際」に焦点を絞った内容の冊子へと、変更を行った。

在宅看取りを障害する要因の一つは、看取りの実際の問題である。どんなに死を覚悟しても、いざ臨終の時、家族が大きく動揺するのは、当然のことである。主治医の到着の遅れが家族の期待を裏切ってしまったことがあったが、両者の看取りのイメージがかなり隔たっている場合がある。この思い違い（看取りのイメージの違い）が、家族、医療者の双方を在宅医療から敬遠させている大きな要因であると想像する。

本冊子は、看取りの法律的問題にもかなり踏み込んだ内容とし、「死亡の瞬間に、医者がいなくても問題がない」や「救急車を呼ぶとどうなるか」といった、従来の啓蒙冊子では扱っていない詳細な内容まで敢えて踏み込んでみた。

#### 2) 企画者、執筆者、印刷者

長尾和宏医師、山下和枝ケアマネージャー、訪問看護師、在宅事務員および在宅看取りを経験した家族6名が、冊子の企画、執筆を担当した。A4版35ページの小冊子を、日興商会にて3000部印刷した。

#### 3) 作成経過

家族らの原稿は、12点集まったが内容的に同じようなものが多く、代表的なもの6点に絞り、あえて原文のまま掲載した。

#### 4) 作成にあたり注意したこと

本事業の目的は、日本の在宅医療の推進であるため、特定の医療機関や医師名などの名前は、冊子から敢えて排除した。巻末の連絡先も、意図的に他市に事務所をかまえる別法人内の「在宅医療を考える会」と記載した。

特定の医療機関や事業所の宣伝にならぬよう細心の配慮をし、公共性を高めることで、広く利用されることを期待し、敢えてこのような手法を選択した。

### 2 冊子の活用法と広報の実際

- 1) 近隣の基幹病院7ヶ所、市内の中小病院の地域医療室、地域医師会などに置いてもらい、冊子の配布と活用を依頼した。

- 2) 市役所関係、地域包括支援センター、老健施設など、役所や介護施設など、約 10ヶ所にも置いて頂き、配布と活用を依頼した。
- 3) 近隣の民生委員、老人会を通じても、地域の公民館などに配布して頂いた。
- 4) 6月30日より高山市で開催される「日本ホスピス・在宅ケア研究会全国大会」とメイン会場でも配布予定である。
- 5) 私が世話人を務める、在宅医療に関する研究会が現在4つあるが、その場でも配布し、活用を依頼する予定である。
  - ・ 阪神ホームホスピスを考える会
  - ・ ドクターとケアマネージャーの連携を進める会（ケアマドの会）
  - ・ 阪神緩和医療研究会
  - ・ 尼崎の在宅医療の病診連携を考える会
- 6) 以上の活動のアウトカムの評価には、もう少し時間を要する。

### 3 これまでの在宅医療の啓蒙活動

- 1) 昨年、在宅医療について記した拙著「町医者冥利」を刊行し、毎日新聞、神戸新聞などで、在宅医療の啓蒙に関する記事を掲載していただいた。
- 2) 私の医院の講義室で年10回程度開催される、地域住民を対象とした「尼崎健康大学」（これまで延べ50回以上開催）の中で、「在宅医療」や「自宅での看取り」をテーマの講演を既に3回行った。平成19年9月にも「住み慣れた家で療養するには」というテーマで講演をするが、その際にも、本冊子を十分に活用する。
- 3) 昨年、毎日放送で放映された、中村玉緒氏主演の連続ドラマ「新・命の現場から」は、日本ではじめて在宅医療をテーマとした連続ドラマであった。このドラマの制作には、当院が深く関わった。テレビスタッフと共に在宅患者を訪問するなど、構想段階から全面的に協力した。演技指導にも、当院スタッフ（訪問看護師）が関わった。このドラマは昼のドラマとしては高い視聴率であったが、今後は、夜のゴールデンタイムでの同様の在宅医療をテーマとしたドラマの制作を希望しているが、大変効果的で楽しい啓蒙活動であった。
- 4) 当院では、多くの医療関係者の在宅医療の同行実習に協力している。大阪大学医学部の臨床実習生、県立尼崎病院の研修医、兵庫県下や大阪府下の看護大学の学生や教職員、フリーの実習希望者など、すべての実習希望者を受け入れている。医療従事者への在宅医療の啓蒙も、在宅療養支援診療所の重要な責務と考えている。今回の冊子は、今後の実習者の教育に役に立つであろう。

### 4 今後の啓蒙活動の予定

- 1) まだまだ、在宅医療の啓蒙が足りないと感じている。特に病院医師を始めとする病院医療者の啓蒙が急務と考える。病院医療者を対象とした講演を何回か行ってき

たが、その際に、本冊子を活用したい。実は、真っ先に読んで頂きたいのが病院医師である。

- 2) これまでテレビ局から、「在宅医療」の取材がいくつかあり、現在、某テレビ局と、在宅医療啓蒙の企画を打ち合わせ中である。在宅医療の素晴らしさを広く国民に知っていただくため、公平性に充分配慮した、慎重な情報提供を行う予定である。その際には、今回作成した小冊子も活用する予定である。
- 3) 本冊子の反応が良ければ、新聞などのメディアを通じての啓蒙も行う予定である。

## 5 反省と問題点

- 1) 法律的問題にも触れたが、微妙な問題もあり、専門家の検証を待ち加筆したい。
- 2) 内容に偏りがある可能性がある。多くのご意見、御批判を頂き、できれば良い第2版につなげたい。
- 3) 在宅希望患者は増えているが、訪問看護師のバーンアウトが続き、永続的な在宅スタッフのマンパワーの確保が急務である。患者さんではなく、医療者への啓蒙や労働条件などの配慮も無視できない。
- 4) 「全て在宅」という発想には無理がある。在宅療養の慎重に適応を考えていく段階にきている。
- 5) 癌患者と非癌患者を、分けて考える段階にきている。すなわち、在宅医療は、そろそろ「総論の啓蒙」から「各論の啓蒙」への段階にきていると考える。

## 6 最後に

在宅医療は、人間医療です。ただ単純に素晴らしいと感じる活動をこれからも続けたいし、この楽しさ、面白さを、もっともっと多くの患者さんや病院医療者に知って欲しい。

今回、このような啓蒙事業を支援していただいた勇美記念財団に、心より感謝申し上げます。

以上

※添付資料 冊子「はじめての在宅医療

—10の素朴な疑問に在宅医がお答えします—」原稿

---

本研究は「財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団の助成による」ものである。